

Title	『花伝』の「問答条々」第九条の増補試論：「花の論」の質をめぐって
Author(s)	尾本, 頼彦
Citation	演劇学論叢. 2004, 7, p. 179-195
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97515
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『花伝』の「問答条々」第九条の増補試論

——「花の論」の質をめぐつて——

尾 本 頼 彦

はじめに

世阿弥の能楽論を代表する『花伝』が後年に増補された問題については、表章氏が「『花伝』から『風姿花伝』への本文改訂」（『語文』昭和五十六年四月）で総合的に究明された結果、『花伝』が応永七年以降数度にわたって大幅に改訂・増補されたことが判明し、当初の第三篇までの『花伝』は「初期花伝」と称されている。

右の表氏の研究によって、世阿弥自身による『花伝』への増補の問題についてはその大要が解明されたとしてよいと思われるが、増補箇所についての新たな指摘は今後もなされてゆくのではないかと思われる。本稿もそのような試みであり、ここでは「問答条々」第九条について、この増補の問題を考えてみたい。

本稿で取り上げる「問答条々」第九条は、『花伝』の「奥義」や「別紙口伝」において「花伝の花の段」と呼ばれていることもあり、従来、「花」について説く「初期花伝」における最終条としてなくてはならない条として理解されている。従来、同条の増補箇所として指摘されているのは、日本思想大系「世阿弥 禅竹」（表章校訂、岩波書店、昭和四十九年）で指摘された文末の慧能の偈と、さらに、岩波講座「能狂言Ⅱ」「能楽の伝書と

芸論」（表章担当分、昭和六十三年）で指摘された「若、別紙の口伝にあるべきか」の一句の、合計二箇所である。

ところで、『花伝』は、題名に「花」の語を用いていることから、全条「花」について説かれていると思われるがちである。しかし、重田みち氏が「花伝」成立の初期の経緯と世阿弥の「花」(『能研究と評論』二十一号、平成八年)で指摘されているように、全25箇条(序文・奥書・「物学条々」の序跋を除いた数)において、「花」の語が全く見えない条は11箇条に達している。さらに、表氏認定の「初期花伝」をもとに「花」の語の有無についてみると、「初期花伝」の全24箇条中13箇条に「花」の語が見られないことになる(「問答条々」第八条は全条を増補とした場合の結果)。

つまり、「初期花伝」で「花」の語が用いられているのは、「年来稽古条々」の「七歳」の条以外の6箇条と、「物学条々」の3箇条(「物狂」「修羅」「鬼」の各条)と、「問答条々」の2箇条(第四条と第九条)の11箇条に過ぎないことになる。なおこの内、「鬼」の条の「花」が用いられている部分については、重田氏が右の論考で後年増補説を説いておられるし、「修羅」の条の「花」が用いられている但し書部分については、味方健氏が増補であることを指摘しておられる(「修羅の系譜」「能の理念と作品」和泉書院、平成十一年)。

これらを総合すると、「初期花伝」で「花」の語が用いられている条は全条のほぼ三分の一になり、しかも「花」の語が用いられている条の三分の二が「年来稽古条々」で用いられていることになる。本稿で検討の対象とする「問答条々」は残る三分の一のなかに含まれているのであるが、これら「初期花伝」の「花」の語を通覧すると、「問答条々」第九条の「花」についての語は、他の「花」の語とはその記述の質においてかなり異質のように思われる。

そこで本稿では、「問答条々」第九条の「花の論」とそれ以外の「初期花伝」の「花の論」との比較を中心

に、それに、「初期花伝」では用いられなかった可能性の高い用語が「問答条々」第九条に用いられていることなどを指摘し、あらためて「問答条々」第九条における増補の問題を考へてみることにするが、あらかじめ結論をのべておくと、第九条はその全体が後年の増補の可能性があるとというのがその主旨である。さきにものべたように、第九条は「花の段」とも呼ばれている「問答条々」の最終条である。そのような位置にある条が「初期花伝」に存在しなかったとする推定はそう軽々になされるべきでないことは言うまでもないが、以下にのべるように第九条には増補を思わせる微証が少なくないのであつて、試論としてここに提示させていただくこととする。

なお、本稿で使用した世阿弥伝書の本文は前掲の『世阿弥 禅竹』の校訂本文であり、また、表氏の増補に関する説は特記しないかぎり、前掲の『「花伝」から「風姿花伝」への本文改訂』によるもので、以下、それによる場合は出典をいちいち明記しない。

一 「問答条々」第九条の前半部分と「初期花伝」の「花の論」の比較

この節では、「問答条々」第九条の前半部分と「初期花伝」の「花の論」を比較するが、「問答条々」第九条の全文の詞章はつぎのとおりである。説明の便宜のために、全体を内容からA～Gの七つの部分に分けた。

問。能に花を知る事、此条々を見るに、無上第一なり。肝要也。又は不審也。是、いかにとして心得べきや。…A

答。此道の奥義を極むる所なるべし。一大事とも秘事とも、たゞこの一道なり。先、大かた、稽古・物学の条々にくはしく見えたり。時分の花、声の花、幽玄の花、かやうの条々は、人の目にも見えなれども、その

態より出で来る花なれば、咲く花のごとくなれば、又やがて散る時分あり。されば、久しからねば、天下に名望少なし。…B

たゞ、まことの花は、咲く道理も散る道理も、心のまゝなるべし。されば久かるべし。此理を知らむ事、いかゞすべき。…C

若、別紙の口伝にあるべきか。…D

たゞ、わづらはしくは心得まじきなり。先、七歳よりこのかた、年来稽古の条々、物まねの品々を、能々心中にあて、分ち覚えて、能を尽くし、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし。この物数を極むる心、則花の種なるべし。…E

されば、花を知らんと思はゞ、先種を知るべし。花は心、種は態なるべし。…F

古人云、心地含諸種 普雨悉皆萌 頓悟花情已 菩提果自成…G

このうち、表章氏によつて後年に増補された部分と認定されているのはDとGの部分であり、その他の部分は「初期花伝」にはじめから存在したとするのが、現在の一般的な理解である。右のA、B、Cの部分の「花の論」を「初期花伝」の場合と比較してみよう。

まず、「能に花を知る事」というA部分の間であるが、「物学条々」「鬼」の条に「花を知らぬ為手」という言葉が用いられているから、この問自体は「初期花伝」にもありえたものである。しかし、ここで注意されるのが、「無上第一」の語である。A部分の間にある「無上第二」という語は、世阿弥伝書では、他には「問答条々」の第七条の後年に増補された部分のみであり、その他「無上——」という熟語はつぎのごとく、「初期花伝」の増補部分か、『花伝』以降の伝書にしか用いられていないのである。すなわち、「無上至極」は「問答条々」第五条の増補部分、「無上大事」は『五音』下、「無上妙感」は『三道』、「無上妙体」は『却来華』、「無上無味」は『申楽談儀』に用いられている。

したがって、問の部分に「無上第一」という、「初期花伝」に用いられていず、後年に増補された部分や後年の伝書に用いられている「無上——」という熟語が用いられていることは、問自体が後年に増補されたのではないかと疑えることになろう。

BとC部分は「年来稽古条々」にみえる「時分の花」と「まことの花」についての論である。この「年来稽古条々」における「時分の花」と「まことの花」の論は、「初期花伝」と後年に増補された部分とはつぎのように明らかな差異がある。

まず、「初期花伝」の「年来稽古条々」にみえる「時分の花」と「まことの花」の論の実例を示す。「十二三より」の条は「此花はまことの花にはあらず、たゞ時分の花なり」であり、「十七八より」の条は「声変りぬれば、第一の花失せたり」であり、「二十四五」の条は「当座の花にめづらしくして、立合勝負にも一旦勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と思ひしむるなり」や、「これもまことの花にはあらず。年の盛りと、見る人の一旦の心のめづらしき花なり」であり、「三十四五」の条は「此頃の能、盛りの極めなり。こゝにて、この条々を極め悟りて、堪能になれば、定て天下に許され、名望を得つべし。若、此時分に、天下の許されも不足に、名望

も思ふ程もなくば、いかなる上手なりとも、いまだまことの花を極めぬ為手と知るべし」であり、「四十四五」の条は「能は下らねども、力なく、やうやう年闌けゆれば、身の花もよそ目の花も失するなり」であり、「五十有餘」の条は「凡その頃、物数をばはや初心に譲りて、やすき所を少な少々と色えてせしかども、花はいや増しに見えしなり。これ、まことに得たりし花なるがゆへに、能は、枝葉も少なく、老木になるまで、花は散らで残しなり。これ、眼のあたり、老骨に残りし花の証拠なり」である。

以上を要するに、「初期花伝」の「年来稽古条々」の「花の論」は、十二、三歳や二十四、五歳の声と身体の魅力からえられる「時分の花」「めづらしき花」で、立合勝負などで名人などに勝つこともあるけれども、「まことの花」ではないこと、三十四五歳が絶頂期であり、それ以降は身体的魅力が減少していくが、観阿弥は五十二歳の老齡になっても「まことの花」が残っていて、老木に咲く花のようであったということである。すなわち、「初期花伝」においては、「時分の花」「まことの花」という用語が単独で使用されているだけで、後に示す「年来稽古条々」の後年に増補された部分に示されているような、まことの花を獲得するための具体策やそのために心がけねばならない事柄への言及がみられないのである。

一方、「初期花伝」の「問答条々」の「花の論」は第九条を除くと、第四条だけである。その「問答条々」第四条の内容は「はや功入りたる為手の、しかも名人なるに、只今の若為手の、立合に勝つ事あり。これ、不審也」という間にたいして、「古き為手ははや花失せて古様なる時分に、めづらしき花にて勝つ事あり」というものである。この「めづらしき花」によって若い役者が名人に勝つ事があるということは、「初期花伝」の「年来稽古条々」の「二十四五」の条で説かれているのである。

ところが、「年来稽古条々」「二十四五」の条の増補部分（「初期花伝」にはなかつた部分）においては、「人も誉め、名人などに勝つとも、これは一旦めづらしき花なりと思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直にし定め、名を

得たらん人に事を細に問ひて、稽古をいや増しにすべし。されば、時分の花をまことの花と知る心が、眞実の花に猶遠ざかる心也。たゞ、人ごとに、この時分の花に迷て、やがて花の失するをも知らず。初心と申はこの比の事也」と説かれている。すなわち、「初期花伝」のように、「時分の花」が「まことの花」ではないとする水準から一歩進んで、「時分の花」で人に勝つても、それは若さ故の珍しい花でしかないと自覚して、様々な曲に対する演技を正しく身につけ、名人に細部まで教えを乞い、ますます稽古を積重ねていくという、まことの花を獲得するための具体的な方策を示し、さらに、「時分の花」が「まことの花」であると勘違いして、「まことの花」をえることに失敗することにたいする注意を喚起し、さらに傍線部のように「時分の花」がたちまちに失せることにたいする注意を喚起しているのである。

また、「問答条々」第四条の増補部分では、「公案を極めたらん上手は、たとへ能は下るとも、花は残るべし。花だに残らば、面白き所は一期あるべし。されば、まことの花の残りたる為手には、いかなる若き為手なりとも、勝つ事あるまじき也」と、「まことの花」を獲得する具体策として公案を極めることに言及し、さらに、公案を極めた上手が獲得した「まことの花」の強さ・久しさについて言及しているのである。

このように、「初期花伝」とその後年に増補された部分の「時分の花」と「まことの花」の「花の論」を比較してみると、前者には「まことの花」をえるための具体策がみられないが、後者にはそのための具体策や心すべき事項がのべられているという差異が存在しているのである。

以上をおまえて「問答条々」第九条のBとC部分の記述をみると、B部分は、実際に咲く花がたちまち散るよ様に「時分の花」が久しくないことをのべている。これは右にみた「年来稽古条々」「二十四五」の条の増補部分の傍線部と同類の内容である。また、C部分は、「まことの花」をえた役者はその花の咲かせ方や散らせ方を知っていて、それは役者の思いのままであるから、いつまでも魅力を保ちつづけられることをのべているが、こ

これは右にみた「問答条々」第四条の増補部分と同類の内容である。

以上を要するに、BとC部分の「花の論」の質は、「初期花伝」の水準でなく、後年に増補された部分の水準にあると言えるのではなからうか。

つぎに、右の結論を補強するために、B部分のはじめにある「秘事」という語について検討しておきたい。この「秘事」という語は、「花伝」の初期三篇では、他には「物学条々」「物狂」の条と「問答条々」第七条のみで用いられている。前者は表氏により増補部分とされ、後者は伊藤正義氏により増補部分とされている（「花の伝―世阿弥の出発―」『宝生流声の百番集』別巻5、昭和五十年）。伊藤氏の説はその後表氏によって追認されている（岩波講座『能狂言Ⅱ』「能楽の伝書と芸論」）。その他、「秘事」という用語は、「初期花伝」以降の伝書である「別紙口伝」や「花鏡」や「申楽談儀」で用いられている。

さらに、奥書・跋文に「他人に秘密を漏らしてはいけない」旨の表記をするようになったのは、「花修」や「別紙口伝」以降である。なお、この点に関しては、「奥義」は「秘義云」という記述がみえることが問題になるかもしれないが、これは吉田本の形である。『世阿弥 禅竹』はここを吉田本に従って「秘義云」としているが、重田みち氏は「初期三書から『花伝』へ、『花伝』から『風姿花伝』へ」（『文学』平成十二年十一月・十二月号）で、「秘義云」で導かれる後半の内容が秘密にするようなものでないことを理由に、他本の「私義云」の方が正しいと考えておられる。筆者も「奥義」の跋文・奥書に「花修」や「別紙口伝」に見られるような、伝書を秘密にせよという記載がないことから重田氏説に賛同したい。

このように、「問答条々」第九条の答のはじめの部分に、この条以外では後年に増補された箇所や後年の伝書に使用されている「秘事」の用語が使用されている事実は、右でえられた結論をさらに補強することになる。

二 「問答条々」第九条のE部分と「初期花伝」の「花の論」の比較

この節では、「問答条々」第九条のE部分と「初期花伝」の「花の論」を比較してみたい。

まず、E部分前半の「能を尽くし、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし」であるが、この部分を、伊藤正義氏は鑑賞日本古典文学『中世評論集』（昭和五十一年）の「風姿花伝」で、「能の物まねのあらゆる種類を稽古し尽くし、演技上の工夫を極めることが先で、その後、この花の散り失せぬ境地——まことの花——を知ることができらるう」と理解しておられる。また、伊藤氏は右の論考「風姿花伝」の脚注で、右の部分の「能」を「能数・物数におなじ」としておられるが、これは、「別紙口伝」第一条にこの部分のことが「花伝ノ花ノ段ニ、『物数ヲ極メテ、工夫ヲ尽クシテ後、花ノ失セヌ所ヲバ知ルベシ』トアルハ、コノ口伝也」と言及され、また、「奥義」にも「花伝の花の段に、『物数を尽くし、工夫を極めて後、花の失せぬ所をば知るべし』と言へり」と言及されているため、「問答条々」第九条の「能を尽くし」は「物数を尽くし」と同じであろうと考えられたためであろう。表氏も第九条の詞章が「物数」から「能」へ後年に改訂されたことを指摘しておられる。つまり、「問答条々」第九条では「物数」と「花」が「物数〓花」という形で結びつけられているのである。しかも、その「花」は「花の失せぬ所（まことの花）」である。

この点に関しては、重田みち氏も、前掲の論考「『花伝』成立の初期の経緯と世阿弥の『花』」で、「問答」第五条が現在のような「花」の語を全く含まない本文になっているのは、同条が執筆された時点で、世阿弥が「物数」を極めることをまだ「花」の語と結びつけていなかったからと考えるべきであろう。世阿弥が両者を結びつけたことが知られるのは、右に述べた（『問答』）第九条が最初である」と指摘しておられる。

筆者はさきに「奥義」と「別紙口伝」——その先後関係と世阿弥能楽論の展開——（『芸能史研究』第一五八

号、平成十四年)と「花修」と「別紙口伝」―その先後関係と世阿弥能楽論の展開―(『演劇学論集 日本演劇学会紀要42』平成十六年)で、『花伝』の「花」「面白」「めづらし」「物数」の語の使われ方を検討したが、必要部分をここに総括すると、つぎのようになる。

すなわち、「初期花伝」では「花」「めづらし」「面白」がそれぞれ単独で使用されていて、「花」も「時分の花・まことの花」という対比がその思想の中心であり、「めづらし」も「当座の花にめづらしくして、立合勝負に勝つ」という単独の水準の用法であり、「面白」についても、「物狂」「修羅」「鬼」「唐事」の個々の芸の「面白さ」について単独に用いられている段階であった。ところが、「初期花伝」の増補の段階(問答条々)第四条「面白しと見る心は、同じ花也」、または、「奥義」(「此面白しと見るは花なるべし」)ではじめて「花」と「面白」の二つが同じである(「花||面白」)という理解が示される。また、「花修」では「たとひ悪き能も、めづらしくし替へく色取れば、面白く見ゆべし」と説いていて、「めづらし」と「面白」の二つが同じである(「めづらし||面白」)という理解が示される。それがさらにおし進められて、「花」と「面白」と「めづらし」が結びつき、「別紙口伝」第一条の「人ノ心ニメツラシキト知ル所、スナハチ面白キ心ナリ。花ト、面白キト、メツラシキト、コレ三ツハ同じ心ナリ」(「めづらし||面白」「花||面白||めづらし」)という理解に到達する。

さらに、「物数」という言葉を世阿弥が用いるのにも色々な段階があり、「初期花伝」の「年来稽古条々」や「問答条々」第五条の段階の「物まねの数々」「演じえる演目数」「レパートリー」という意味の単独用法が、「問答条々」第九条において、「物数||花」という形で「物数」と「花」が結びつけられるにいたる。それがさらにおし進められて、「物数」と「めづらし」と「花」が結びつき、「別紙口伝」第一条の「物数ヲ尽クシテ、工夫ヲ得テ、メツラシキ感ヲ心得ルガ花ナリ」(「物数||メツラシ||花」)という理解に到達する。

このような私見をふまえると、E部分前半の「能を尽くし、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべ

し」という、「物数」と「花」を「物数||花」という形で結びつけている世阿弥の理解は、「物数」が単独で使用されている「初期花伝」の水準ではなく、「面白||花」という認識の「問答条々」第四条の増補部分の水準、または、「奥義」の水準に類似するものであるといえることになろう。

さらに、このE部分では、「まことの花」を知る具体策について、前掲の伊藤氏の表現を借りれば「能の物まねのあらゆる種類を稽古し尽くし、演技上の工夫を極めること」であるとのべているが、このような記述は「初期花伝」には認められない。この点もE部分が後年に増補されたと考える理由である。

また、E部分後半の「物数を極むる心、則花の種なるべし」では、「物数を極むる心」と「花の種」の二事象が同じであるという理解が示されている。すなわち、これらの理解も、「花」「めづらし」「面白し」「物数」がそれぞれ単独で使用されている「初期花伝」の水準ではなく、「面白||花」という理解の「問答条々」第四条の増補部分や「奥義」の水準に類似するものになるう。

三 「問答条々」第九条のF部分と「初期花伝」の「花の論」の比較

この節では、「問答条々」第九条のF部分と「初期花伝」の「花の論」を比較してみたい。

F部分の「花を知らんと思はゞ、先種を知るべし。花は心、種は態なるべし」は非常に難解な一句であり、研究者によってもその理解はいろいろである。そこで、この意味をただしく理解していると考えられる伊藤正義氏の前掲論考の「風姿花伝」の解釈をまず提示しておきたい。伊藤氏はこの一句を、「花を知ろうと思えば、まづ、種を知らねばならぬ。花は心（まことの花は、能と工夫を極めて花の公案を悟った心から生じる）、種はわざ（花の種とは、物まねの風姿・風体だ）」ということになろう」と現代語訳しておられる。

まず、このF部分では、「まことの花」を知る具体策について、伊藤氏の表現を借りれば「まことの花は、能

と工夫を極めて花の公案を悟った心から生じる」とのべているが、このような記述は「初期花伝」には認められない。この点がまずF部分が後年に増補されたと考えられる理由である。

つぎに、「花は心、種は態なるべし」という表現自体が禅の公案風であることに注目すべきであろう。この一句は世阿弥の真意を理解することが難しい箇所であるが、とくに、「花は心」が難解である。そこで、以下、諸氏の「花は心」に関する説を紹介してみると、まず、能勢朝次氏は『世阿弥十六部集評釈』（岩波書店、昭和十五年）の「語釈」で、「花のもととなる種は伎芸である。しかし、種ばかりあつても花が咲かぬ如く、伎芸ばかりでは芸の花は開かない。種をうるほし育てる雨露の必要な如く、伎芸をして花を開かしめるには、心に於ける工夫公案が必要である。その点を、「花は心」といつたものである」と理解しておられる。

つぎに、小林智昭氏は「世阿弥研究―心の論理―」（『国語と国文学』昭和二十七年五月）で、「種は物数を究め尽くす心」であり、「花は心」の「心」は単なる工夫公案というような意味ではなく、「むしろ花は工夫公案の埒外にある」もので、「物数を究むる心」とも自ら性格を異にするものであり、それは『花鏡』の「曲は心なり」の場合と同様、象徴的表現として超感覺的存在であり、自然に滲み出る瑞感の威風であり、不捉の全人的香気である。花の性格を斯の如き「心」と認め、その根幹としてのわざと対立せしめて「花は心・種はわざ」と説いたものと思われる」と、能勢氏の説とは異なる見解を示しておられる。

伊藤氏は前掲論考の「風姿花伝」で、「物数を極むる心」が「花は心」というときの心と同じではないのである。「物数を極むる心」とは、まず花の種の獲得を志向する心であり、それを果たしたとき、「物数を極め尽くした仕事」となるであろうが、さらにその段階に到って花の公案を悟り知ることができたなら、それがすなわちまことの花を咲かすことになる。「花は心」の心とは、そのような花の公案の大悟の謂でなければならぬ。さればこそ世阿弥は「頓悟」の偈を引くのであるが、より具体的には、花の公案を「物数を尽くして、工夫を得て、め

づらしき感を心得るが花なり」(別紙口伝)と述べて、めづらしき感を心得ることと説明しているのである」と理解しておられる。

筆者は右の諸氏の説のうち、伊藤氏の理解に賛同するが、このように「花は心、種は態なるべし」は人により解釈が異なってくるほどに難解な、禅の公案といってもよい水準のものであり、「時分の花」より「まことの花」がすぐれているという「初期花伝」の花の論の質とはちがっていることは明らかであろう。

ところで、この第九条については、「奥義」と「別紙口伝」においても言及があるが、そのうち、「別紙口伝」では「花は心、種は態なるべし」は、「花トテ別ニハナキモノナリ。物数ヲ尽クシテ、工夫ヲ得テ、メヅラシキ感ヲ心得ルガ花ナリ」と明快に説かれている。それにはたいして、「問答条々」第九条の右の箇所が難解であるのは、「問答条々」第九条では禅の公案を与えたという位置づけであり、その解は「別紙口伝」に譲ったということではないであろうか。「初期花伝」の時期に公案を与えるような水準には世阿弥は禅に馴染んではいなかったことは通説であり、世阿弥が「公案」の用語を使用するのは「花修」「別紙口伝」の段階からであると考えられているのである。そうすると、F部分は後年に増補された部分と考えてよいのではないだろうか。

また、「花は心、種は態なるべし」につづくG部分の詞章は、従来から増補と考えられている慧能の「六祖壇経」などにみえる偈である。この偈について、伊藤氏は前掲「風姿花伝」で、「花は心、種は態なるべし」に凝縮せしめた意味の基づくところを、世阿弥は慧能の有名な偈を引くことによって示している。それは、単に花の理をよくいいあらわしているからの引用のではなく、この偈に示された禅の理法―悟りの型としての「頓悟」が、世阿弥の花の理を触発せしめたということ、そして花伝の総括としての第九問答の全内容が、実にこの偈にあることを示したことにほかならぬと考えたい」として、つぎのように口語訳しておられる。

心地に諸の種を含み（心中に花の種―稽古の条々、物まねの品々をわかち覚えて）

普ねき雨に悉く皆萌す（能を尽くし、工夫を極めて後）

花の情（花の公案）を頓悟しおわれば

菩提の果（まことの花）はおのずから成る（心のままである）

伊藤氏はさらに「口語訳において、これを世阿弥の花の理に沿っていい換えたのも、こうした立場からの処置である。世阿弥の禅的教養については、香西精氏の指摘するところ（『世阿弥新考』所収）であるが、その影響は、単に用語の面のみならず、世阿弥理論の根源たる花の公案にあらわれているというべきであろう」としておられるが、筆者も伊藤氏の理解に賛同する。

世阿弥がいつから禅と接触したかについて、香西氏は「世阿弥の禅的教養」（『文学』昭和三十三年十二月号）で、「応永十五年以後、さして遠からぬある時期」とされるし、表章氏は、「公案」という禅用語の使用例を分析され、「世阿弥が「公案」を自己の語彙に加えたのは、その語が一つも使用されていない奥義篇（の最初の形）の成立後、第六花修や第七別紙口伝の自筆本を書く以前、具体的には応永十年代中頃からではなからうか」としておられる。

したがって、応永十年代中頃以降ならば、公案風の「花は心、種は態なるべし」と慧能の『六祖壇経』などにみえる偈が同時期に「初期花伝」に増補されたケースも十分考えられるのではないだろうか。そのような想定をしてみれば、両者は一体感がある。

おわりに

以上、「初期花伝」の「花の論」と「問答条々」第九条の「花の論」を比較検討し、「問答条々」第九条の全文が後年の増補である可能性が高いことを指摘したが、さいごに、この推測にかかわることがらについて考えてみたい。

「問答条々」第九条は「問答条々」の最終条であるが、表章氏は、その前条の第八条に関して、「全体の論旨の遊離性や「風情」の語義の特異性から、第八条の「しほれたる」の論は全体が増補であることも想定される」と説いておられる。かりにその指摘に従うならば、「問答条々」においては第八・九条という連続する両条全体が増補である可能性があるということになるが、すると本来の「問答条々」は第七条が最終条ということになる。「問答条々」第七条が「初期花伝」の最終条であるという説にたいしては、「初期花伝」の「花の論」の最後として納まりが悪いとの疑問が生まれるかもしれない。この疑問にたいしては、筆者はつぎのように考えている。

まず、「初期花伝」には、序文も跋文もなかったことは表氏の論稿で明確であり、現在見るような首尾一貫した伝書の形ではなかったことは確実である。さらに、「花の論」といつても、「問答条々」第八条と第九条を除いた「初期花伝」は、「年来稽古条々」に説かれているような、「時分の花」と「まことの花」という考え方は示されているが、「まことの花」をえるための具体策を提示せず、もっぱら「時分の花」よりも「まことの花」が重要であることが説かれていることになる。一方、「まことの花」をえるための具体策が提示されているのは、「初期花伝」の増補部分に限定されているのだが、このことは世阿弥が「まことの花」をえるための具体策を提示するのにならざるに時間を必要としたことを示唆していると思われる。すると、「初期花伝」の「問答条々」は、

「年来稽古条々」以上に「花」を説明・補強する伝書ではなく、表氏が前掲の『世阿弥 禅竹』の頭注で、「九問答から成り、一貫する主題はない」とされるごとく、「年来稽古条々」と「物理学条々」で論じなかった「会場の雰囲気や当日の能の成否を予知する方法と、その対策」「一日の能の展開の序破急」「立合い勝負に勝つために能数を持つことの重要性」「年功を積んだ名人も花が失われると若い為手に負けることがあること」「上手は下手の手本、下手は上手の手本と心得て、能と工夫を極めるべきこと」「能の位に生得の位と稽古による位があるとして、その差別を説くこと」「謡の文句に当てて所作をすること」の七箇条を問答体で論じた伝書ということになる。これは従来の『花伝』生成論からはかなり飛躍した見解ではあるが、一つの可能性として、ここに提示させていただくことにする。

さいごに、本稿では『花伝』の増補部分に「まことの花」を獲得するための具体策が記されているとしたが、そのような視点が「初期花伝」以降の『花伝』においてどのように展開したかについて、さきへのべた「初期花伝」の増補部分（「年来稽古条々」の「二十四五」の条や「問答条々」第四条と第九条）以外の事例を検討してきた。

まず、「奥義」では「堪能にて、天下の許され得ん程の物は、いづれの風体をするとも、面白かるべし。風体・形木は面々各々なれども、面白き所はいづれにもわたるべし。此面白しと見るは花なるべし。是、和州・江州、又は田楽の能にも洩れぬ所也。されば、洩れぬ所を持ちたる為手ならでは、天下の許され得ん事、あるべからず」と、大和猿楽と近江猿楽と田楽の能のあらゆる風体をマスターした十体にわたる演者が天下の許されえることが主張されている。この天下の許されえた演者は「まことの花」を身につけていると考えてよいであろう。また、「花修」では第一条で、「よき能と申は、本説正しく、めづらしき風体にて、詰め所ありて、かゝり幽玄ならんを、第一とすべし」と説かれているが、この「よき能」とは「まことの花」のある能と考えてもよい

と思われる。また、「花修」第四条の「能を知る心にて、公案を尽くして見る」為手は「まことの花」のある為手であろう。

このように、「まことの花」をえるための具体策として、「奥義」では十体にわたり、物数を極めることの重要性を説き、「花修」ではめづらしさや幽玄や能を知ることの重要性を説いている。

一方、「まことの花」をえるための具体策の理論化という点で、「奥義」では右の引用部のように「此面白しと見るは花なるべし」「面白し花」と説き、「花修」では「たとひ悪き能も、めづらしく替へし替へ色取れば、面白く見ゆべし」「めづらし面白」と説いていて、これらが総合されて「別紙口伝」第一条で説く「花面白しめづらし」につながる。ここで注意されるのは、右では「面白」「めづらし」という要素については言及されているが、「物数」については言及がないことである。

ところが、本稿で問題にした「問答条々」第九条では、「能を尽くし、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし」「物数花」、「別紙口伝」第一条では、「物数を尽くして、工夫を得て、めづらしき感を心得るが花なり」「物数めづらし花」というように、「物数」への言及があり、「物数」という要素に着目した「花」の理論が展開されているのである。